

## 2006 年攻读硕士学位研究生入学考试试题

考试科目：基础日语

科目代码：339#

适用专业：日语语言文学

(试题共 7 页)

(答案必须写在答题纸上, 写在试题上不给分)

### 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(七〇点)

何年かまえ、中米奥地の発掘調査に出かけた研究チームの報告を読んだなかに、こんなことがありました。

調査団は、必要な機器等の荷物一式を携行するためにインディアンインディアンのグループをやとった。調査作業の全工程には完璧な日程表ができていた。そして初日から四日間はプログラムが予想以上によくはかどった。運搬役のインディアンたちは「クッキョウ」で従順で、日程どおりに進んだのだ。

ところが五日目になって、彼らは先へ行く足を「a」止めた。だまって全員で輪になり、地べたに座りこんで、もうテコでも荷物をかつごうとしない。調査団の人たちは賃金アップを提案したがだめだった。叱りつけたりついには武器まで持ちだして脅したりしてみたが、インディアンたちは無言で車座になったまま動かない。学者たちはお手あげの状態で「b」あきらめた。日程には大幅な遅れが生じた。

と、とつぜん――二日後のことだった――インディアンたちは同時に全員が立ちあがった。荷物を担ぎあげ、予定の道を前進しだした。賃金アップの要求はなかった。調査団側から改めて命令したのでもなかった。このふしぎな行動は、学者たちには「c」説明のつかぬことだった。インディアンたちは、理由を説明する気など「d」ないらしく、口をとざしたままだった。

ずっとあとになって、白人グループの数人と彼らとのあいだにいくぶんの信頼関係が生じてから、「e」ひとりが答えをあかした。「はじめの歩みが速すぎたのでね」という答えだった。「わたしらの魂があとから追いつくのを待っておらねばなりませんでした」。

この答えについて、私はよく考えこむことがあります。工業化社会の文明人である私たちは、未開民族の彼らインディアンから、学ぶべきところまことに大きいのではないのでしょうか。

私たちは、外的な時間計画「A」をとどこおりにくなくしています。が、内的時間、魂の時間にたいする繊細な感情を、とくに殺してしまいました。私たちの個々人にはもはや逃げ道がありません。ひとりで枠をはずれるわけにいきませんから。私たち自身がつくってしまったシステムは、「2」ヨウシナ「なき競争と殺人的な3」ギョウセキ「強制の経済原理です。これをともしないものは落伍します。昨日新しかったことが、今日はどう古いとされる。先を走る者を、はあはあ舌を出しながら追いかける。すでに狂気と化した輪舞なのです。だれかがスピ

ドを増せば、ほかのみんなも速くなるしかない。この現象を B と名づける私たちです。

が、あわただしく走り続ける私たちは、はたしていかなる源から遠ざかりゆくのでしょうか？ 私たちの魂からですって？ そう、私たちの魂は、もうはるか以前に途上に置き捨てられました。それにしても魂を捨て子にしたことで、肉体が病んでいきます。だから病院や神経 4チリョウ 施設は、ひとびとであふれています。魂不在の世界——これが私たちの走りゆく目的地だったのでしょいか？

もうほんとうに不可能でしようか、私たち全員が狂気の輪舞をいっせいに中止して、<sup>7</sup> おたがい車座になって大地に座る、そして無言で待つ、ということとは？

もうひとつの「答え」のことは、文化人類学者の友人から最近聞いたばかりです。これもひとりのインディアン女性の口から出ています。

その友人が旅先で出かけた山の頂上にインディアン<sup>5</sup>の村があった。その地方一帯には水源がたった一カ所にしかなくて、それは山のふもととの井戸だった。村の女たちは、毎日半時間の坂道をおり、婦りは重い水がめを肩にして一時間、山をのぼっていく。友人は、女たちのひとりにたずねた——いっそ村ごと、ふもとの水源近くに移したほうが 5ケンメイ ではないかね——。女の答えはこうだった。「ケンメイ、かもしれませんね。でも、そうしたら私たちは、快適さという誘惑に負けることになると思います。」

私たち文明人には、この答えはさきほどの答え以上にいぶかしく聞こえるのではないでしようか？ 快適であることが、なぜ誘惑と呼ばれるのか？ 私たちが手にした洗濯機、自動車、エレベーター、飛行機、電話、ベルトコンベヤー、ロボット、コンピューター、要するにおよそ現代社会を構成するすべてのものは、快適な生活のためにつくられたはずです。

それとも？

これらのモノは、暮らしをらくにします。骨の折れる仕事から私たちを解放し、もっと本質的なことのために時間をめぐんでくれる。そうではなかったでしようか、私たちを解放するんでしよう？

そうです、確かに——。

ただ、何から解放するのでしょうか？ ひょっとして、まさに本質的なことから？ だとしたら、いったいどうな

っているんでしょ。

1 私たちには、あの奇妙な言葉を口にしたインディアンの女のほうが、ほんとうはこの私たちのだれよりも、ずっとはるかに解放されて自由なのだ、という思いがつきまとって離れません。

聖書にも、これに似たふしぎな言葉があります。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の魂を失ったら、何の益があるだろうか」(マタイ伝一六・二六)。

何言ってる、魂がどうのこうのだって！ そんなもの、我々はどこかの路上にとくに置き忘れてきたよ。未来の世の中は徹底的に快適で、完全に本質不在の世界になってるさ。あなたはそう思いませんか？

(ミヒヤエル・エンデ(子安美知子訳)の文章より)

問1 [ ] 1~5の片かなを漢字に直しなさい。各二点——一〇点

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 4 | 1 |   |   |
|   |   | 5 | 2 |
|   |   |   | 3 |

問2 [ ] a i e に入れるのに最も適切な語句を、次の中から選び、番号で答えなさい。各四點——二〇点

- 1 とうとう
- 2 もう
- 3 ぶつり
- 4 すこぶる
- 5 はじめて
- 6 どうにも
- 7 まるで
- 8 ひたすら
- a [ ]
- b [ ]
- c [ ]
- d [ ]
- e [ ]

問3 [A] に入れるのに最も適切な漢字二字の熟語を、文中から抜き出しなさい。 五點

[ ]

問4 [B] に入れるのに最も適切な語句を、次の中から選び、番号で答えなさい。 五點

- 1 加速
- 2 活力
- 3 進歩
- 4 生産

◎問5 傍線アのようにすることによって、筆者は何か可能になると言っているのか。文中のこばを用いて、二十字以内で述べなさい。一〇点

問6 傍線イで、インディアンの女が「自由」なのは、何から「解放されて」いるからか。文中から十字以内で抜き出しなさい。 五點

[ ]

問7 傍線ウと同様の意味を持つ語句を、文中から十字以内で抜き出しなさい。 一〇点

[ ]

◎問8 傍線エには、筆者のどのような気持ちが示されているか。最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。 五點

- 1 工業化社会の未来への信頼を、否定的な表現を用いて強調している。
- 2 現在の工業化社会に絶望しているが、その未来を何とか信頼したいと思っている。
- 3 現在の工業化社会に絶望して、その未来にも不信を抱いている。
- 4 工業化社会に絶望して、これを皮肉り、冷たい目を向けている。
- 5 工業化社会に絶望して、これまで述べてきた内容をすべて否定している。

## 2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(八〇点)

十二、三年前のことになるが、七月から十月まで、ヨーロッパの旅をし、帰途アメリカを回って十一月末に帰国したことがあった。ローマで夏を過ごし、パリでは秋を迎え、秋を送った。日本に帰ると、リヨソウを解くか解かないに、十二月に入った。このときも、京都、奈良へ出掛けた。古い寺院や仏像を改めて見てみたい思いで出掛けたのであるが、そうしたもののより、京都・奈良の初冬から冬へ移っていく季節の蕭条とした美しさに打たれた。郊外へ行くと冬野が拡がり、初時雨<sup>おきどり</sup>が通り、裸の冬木立がここに日本があると言っているかのように美しく見えた。大和川も、木津川も冬の貌<sup>かたち</sup>をしており、叡山も生駒山も、吉野の山々もいずれも気難しく押し黙って冬の貌をしていた。暦の上では師走であった。やがて、霰<sup>あられ</sup>が降り、葉が落ち、木枯らしが鳴ることだろうと思われた。そして、そうした中を、人の生活は次第に歳暮<sup>さいぼ</sup>の慌<sup>あわ</sup>ただしさの中に駆り立てられていく。やがて初雪・初氷・寒ノ内と、次第に寒気はきびしくなり、目に映る自然はなべて冬ざれたものに変わっていくのだろう。こうした感慨を持った関西の旅であった。

外国の旅を終えて、日本の春の中に帰ってきたことはない。日本へ帰ってきたら早春だったというような、そんな外国旅行をしてみたいと思いつながら末だに果たさないでいる。おそらく、日本の自然の美しさに最も強く打たれる日本への帰り方ではないかと思う。――暦の上で立春を迎え、何となく春はそこまで来ている感じであるが、実際はなかなかそう簡単には春はやってこない。寒さはためらいながら留まっている。「余寒」である。この余寒はいつとはなし「春寒」に変わっていく。他の季節の寒さではない。春の寒さなのだ。春雨・春雪・淡雪・春の霰<sup>あられ</sup>、そうしたものに見舞われながら、桃李の季節はやってくる。梅が咲き、梅が散る。そして、やがて舞台は本格的な春のそれへと回っていく。暁は春暁、昼は春昼、宵は一刻<sup>いこく</sup> A の春の宵である。春野に陽炎が立ち、春霞が山野のたたずまいを一変させる。桜が咲くと、それを散らすために春の嵐がやってくる。桜が散ると、春はまさに酣<sup>はむ</sup>としてその後は日一日春は老いて、なべて物憂い晩春へと移行する。そして、その向こうには、早くも自分の出発を待って、青葉の季節が顔を出し始めている。

日本の風景が、世界のどこの国より美しいに違いないと思うようになったのは、五十代に入ってからである。それまでは自分が生まれ、自分が生い育った日本という国の四季それぞれの眺めにさして関心は持っていない、桜の時

季は桜の時季で、紅葉の季節は紅葉の季節で、その時々でなるほど美しいと思うことはあったがただそれだけのことで、それを格別なものとして楽しむことはなかった。

それが五十代に入ってから、急に日本の風景を特別なものとして受け取るようになり、還暦を過ぎるころから、花があろうとなかろうと、自分を取り巻いている外界の眺めを、その季節以外にはないものとして珍重するようになった。こう言ふと、いかにもサトつたような言い方に聞こえるかも知れないが、別段サトつたわけではない。年齢の作用ということもあるが、それより小説を書く仕事から離れている時間を多少でも持てるようになり、自然に外界の景色というものに目を向けることが多くなった。

画家やカメラマンが、それから歌人や俳人が日本の風景に対して持っている眼を、遅ればせながら、私もまた持ち始めたということになろうか。

日本の風景は美しいと思う。世界中の國がそれぞれにその国独特の美しい風景を持っているが、日本の風景は、日本の風土と結び付いたもので、世界のどの國もが持たない、しかも、なかなか上等な美しさを持っているものだと思う。言うまでもなく、それは春夏秋冬の狂いしない回帰と結び付いた。四季はそれぞれの出番と持ち時間を持って毎年毎年几帳面にやってくる。そして前述したように、非常にデリケートな細かい目盛りをキザミながら、春から夏、夏から秋、秋から冬、冬から春へと移行していく。そしてその季節の移り変わりに従って、自然界のあらゆるものが山も、野も、川も、空も、木も、草も、雨も、風も、大気までがその時々で表情とを異なったものにしていく。

スペインに行ったとき、人工的、工芸的なスペイン庭園を美しいと思い、その後庭園というものは、このように整然とした、造られたものではないかと思ふようになった。日本の庭園は四季それぞれの眺めというものはなく、それは一つの置物でしかない美しさであるが、日本の庭園は四季それぞれの生命を持って動いている。千変万化する自然そのもののシェイクショウに外ならない。桂離宮の庭園一つとっても、四季それぞれの異なった生命を持っている。庭に置かれている樹木や石だけが、庭の生命を支えているのではない。雨も、雪も、風も、朝陽も、夕明かりも、みな庭の美しさを造り出す作業にサンカクしている。自然の一部を切り取って、それをそれなりに整理したものが、日本庭園というものになろうか。今日日本庭園の「D」がヨーロッパやアメリカで注目され、

真似られているが、ジャパニーズ・ガーデンなるものはジャパニーズ・ガーデンであって、所詮日本の庭園ではあり得ない。

ある外国人に日本の春の景色を幾つか選んでもらいたいと言われたことがある。私はソクザに思い付くままを口に出した。春寒のころの伊豆の山々、淡雪の降っている琵琶湖畔、早春、桃李のころの甲斐・信濃、春昼の京都の街、春の日の奈良、吉野の桜。

(井上靖「國高の月」による)

問1 〰〰〰〰〰線①、②の漢字の読みを、ひらがなで書け。各二点—八点

|   |   |
|---|---|
| ① | ② |
| ③ | ④ |

問2 〰線①、②の片仮名を漢字に改めよ。各二点—十二点

|   |   |
|---|---|
| ① | ② |
| ③ | ④ |

問3 空欄 A・Cに漢字二字を入れて、それぞれこの箇所に用いるのにふさわしい四字熟語にせよ。各三点—六點

|   |   |
|---|---|
| A | C |
|---|---|

問4 空欄 B・Dを補うのに最も適当なものを、次のア〜エからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えよ。各二点—四點

- B ア よそおい    イ たたずまい    ウ いでたち  
エ ふるまい

- D ア 様式    イ 形式    ウ 方式    エ 格式

問5 空欄 ③、④を補うのに最も適当なものを、次のア〜カからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えよ。ただし、同じものは繰り返し使わない。各二点—六點

- ア ようである    イ ものだと思う    ウ ものである

問8 〰線③「おそろく……と思う」の後の空欄には、その理由を述べた一文がくる。最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選んで、記号で答えよ。五點

- ア 本格的な春の到来の期待に心ときめく早春のあのひそやかななやぎこそ、私の愛してやまないところだからである  
イ やがて訪れて、百花繚乱と咲き乱れる春こそ、我が国の最も美しい季節だからである  
ウ 訪れの遅い外国の春に先がけて、美しい日本の春にいち早く会おうとする。それは恋人に会う前夜のときめきにも似ているからである  
エ 早春から春にかけての短い期間が、自然が最も微妙な、日本独特な変わり方で移り変わっていく季節であるからである

問9 〰線④「画家やカメラマンが……持っている眼」とはどんな「眼」か。本文中から該当する箇所をそのまま抜き出して記せ。四點

問10 〰線⑤「世界の……持っている」と筆者は日本の風景について述べているが、どういうところにその美しさがあると考えているのか。句読点を含めて三十五字以内で述べよ。一〇點

(a)  $\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$        $\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$       (b)  $\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$        $\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$       (c)  $\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$        $\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$

も適当なものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えよ。五點

ア きりつと引き締まった、鼓しい一種の美感

イ はなやかさのない、ものさびしい一種の美感

ウ　飾りを削り落とした、簡素な一種の美感

エ 順序正しく次々と移っていく、整った一種の美感

ものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えよ。五・点

ア 京都・奈良の古い寺院や仏像はそれほどでもないが、その周辺の初

冬の自然はすばらしいという感慨

イ  
やがては、本格的なきびしい冬が京都・奈良の人々にやってくるだ

ろうという感慨

ウ 京都・奈良の初冬から本格的な冬にかけての季節の微妙な変化は、

すばらしいという感慨

エ 京都・奈良の初冬の自然はすばらしく、やがてさうにきびしい冬が

そこに住む人々に訪れるだろうという感慨

るのか。本文中の十五字以内の語句をそのまま書き抜いて示せ。一〇点

|  | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 | 101 | 102 | 103 | 104 | 105 | 106 | 107 | 108 | 109 | 110 | 111 | 112 | 113 | 114 | 115 | 116 | 117 | 118 | 119 | 120 | 121 | 122 | 123 | 124 | 125 | 126 | 127 | 128 | 129 | 130 | 131 | 132 | 133 | 134 | 135 | 136 | 137 | 138 | 139 | 140 | 141 | 142 | 143 | 144 | 145 | 146 | 147 | 148 | 149 | 150 | 151 | 152 | 153 | 154 | 155 | 156 | 157 | 158 | 159 | 160 | 161 | 162 | 163 | 164 | 165 | 166 | 167 | 168 | 169 | 170 | 171 | 172 | 173 | 174 | 175 | 176 | 177 | 178 | 179 | 180 | 181 | 182 | 183 | 184 | 185 | 186 | 187 | 188 | 189 | 190 | 191 | 192 | 193 | 194 | 195 | 196 | 197 | 198 | 199 | 200 | 201 | 202 | 203 | 204 | 205 | 206 | 207 | 208 | 209 | 210 | 211 | 212 | 213 | 214 | 215 | 216 | 217 | 218 | 219 | 220 | 221 | 222 | 223 | 224 | 225 | 226 | 227 | 228 | 229 | 230 | 231 | 232 | 233 | 234 | 235 | 236 | 237 | 238 | 239 | 240 | 241 | 242 | 243 | 244 | 245 | 246 | 247 | 248 | 249 | 250 | 251 | 252 | 253 | 254 | 255 | 256 | 257 | 258 | 259 | 260 | 261 | 262 | 263 | 264 | 265 | 266 | 267 | 268 | 269 | 270 | 271 | 272 | 273 | 274 | 275 | 276 | 277 | 278 | 279 | 280 | 281 | 282 | 283 | 284 | 285 | 286 | 287 | 288 | 289 | 290 | 291 | 292 | 293 | 294 | 295 | 296 | 297 | 298 | 299 | 300 | 301 | 302 | 303 | 304 | 305 | 306 | 307 | 308 | 309 | 310 | 311 | 312 | 313 | 314 | 315 | 316 | 317 | 318 | 319 | 320 | 321 | 322 | 323 | 324 | 325 | 326 | 327 | 328 | 329 | 330 | 331 | 332 | 333 | 334 | 335 | 336 | 337 | 338 | 339 | 340 | 341 | 342 | 343 | 344 | 345 | 346 | 347 | 348 | 349 | 350 | 351 | 352 | 353 | 354 | 355 | 356 | 357 | 358 | 359 | 360 | 361 | 362 | 363 | 364 | 365 | 366 | 367 | 368 | 369 | 370 | 371 | 372 | 373 | 374 | 375 | 376 | 377 | 378 | 379 | 380 | 381 | 382 | 383 | 384 | 385 | 386 | 387 | 388 | 389 | 390 | 391 | 392 | 393 | 394 | 395 | 396 | 397 | 398 | 399 | 400 | 401 | 402 | 403 | 404 | 405 | 406 | 407 | 408 | 409 | 410 | 411 | 412 | 413 | 414 | 415 | 416 | 417 | 418 | 419 | 420 | 421 | 422 | 423 | 424 | 425 | 426 | 427 | 428 | 429 | 430 | 431 | 432 | 433 | 434 | 435 | 436 | 437 | 438 | 439 | 440 | 441 | 442 | 443 | 444 | 445 | 446 | 447 | 448 | 449 | 450 | 451 | 452 | 453 | 454 | 455 | 456 | 457 | 458 | 459 | 460 | 461 | 462 | 463 | 464 | 465 | 466 | 467 | 468 | 469 | 470 | 471 | 472 | 473 | 474 | 475 | 476 | 477 | 478 | 479 | 480 | 481 | 482 | 483 | 484 | 485 | 486 | 487 | 488 | 489 | 490 | 491 | 492 | 493 | 494 | 495 | 496 | 497 | 498 | 499 | 500 | 501 | 502 | 503 | 504 | 505 | 506 | 507 | 508 | 509 | 510 | 511 | 512 | 513 | 514 | 515 | 516 | 517 | 518 | 519 | 520 | 521 | 522 | 523 | 52 |
|--|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
|--|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|

[illegible]

① 所詮日本の庭園ではあり得ない」の後の空欄

その理由を述べた一文がくる。最も適当なものを次のア〜エから一つ選

んで、記号で答えよ。五点

7 模倣はどこまでも模倣であつて、決して本物ではないからである

イ 樹木や石などの素材を現地で調達するかぎり、本物とはなり得ない。

からである

ウ 日本の風土から切り離して、日本庭園は成り立ち得ないからである

二 設計者が欧米の文化伝統に根ざした人物である以上、それは日本現

味の窪みにすぎないからである

第 7 页